

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/
午前11時40分～午後1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。

6月、五無齋先生を想う

～悟らんとして悟りきれない煩惱の世界に生きた鬼才～

立科町教育相談員 岩上起美男

6月は、立科町が輩出した偉大な教育者、五無齋・保科百助先生が誕生し、そして、逝去された月です。

五無齋先生は、明治元年6月8日、横鳥村山部（現立科町山部）に生まれ、極めて多角的な才能と個性を遺憾なく発揮して、出生日の前日（明治44年6月7日）、満年齢で申しますと、明日43歳になるといふ日に逝かれたのです。

五無齋先生の多角的な才能と個性については、改めて申し上げるまでもなく、すでに多くの方から、謹厳な教育者である五無齋先生と、奔放な奇行と毒舌、放言の人という二面が指摘されています。「振り子」の振り幅が非常に大きな方だったのです。

老生は、五無齋先生のこの「振り子」に何とも言えぬ壮快なものを覚え、今もよく、「五無齋先生がご存命ならば、何と言われるのだろうか。」と考えることがあります。

五無齋先生の教育者としての功績は、諏訪市出身の作家、新田次郎（1912～1980）の小説「聖職の碑」に簡潔に書き綴られています。駒ヶ岳集団遭難という極限状況における師弟愛を描き、昭和53年に映画化（森谷司郎監督・鶴田浩二主演）されたこの小説の中で、校長の赤羽長重に次のように語らせてい

るのです。

「私が五無齋の教育法にあこがれていることだけは事実である。彼自身の足跡にあこがれているのだ。彼は私財を投げ出して保科塾を開いたばかりでなく、県立図書館の基礎を固めるために自らの貯蔵本をそっくり寄付したこともある。教育雑誌の編集もやった。そしてなによりも、彼の偉大なる実践は鉱物を求めて歩くことだった。子どもたちにも歩くことをすすめた。鉱物の標本を作ったのも、子どもたちがそれを手に取り、その美しい結晶を見て、その源を探りたいという気持ちを起こさせるためだ。歩けば鉱物だけではなく、動物でも植物でも直接知ることができる。これ以上の教育はない。机上の学問も必要だが、いたずらに小理屈をこね回す小さな人間を作るような教育には反対だ。」

赤羽校長の職員会におけるこの発言は、教育者、五無齋先生の優れた実践と学識、先見性を端的に語っています。と同時に、赤羽校長の言葉には、教育とは、子どもが主体であり、実践に重きを置き、子どもが自得しなければならぬ、という五無齋先生の教育理念に対する作者、新田次郎自身の共感と敬意がこめられていると思われまふ。

五無齋先生は、研究授業や授業研究会、

教師の研修、生徒指導の基本、学級定員の少数化、授業料の廃止、半学期制、家庭・地域社会との連携などを提言し、実践しました。明治の時代、必ずしもこれらのすべてが受け入れられたわけではありませんが、後にそのほとんどが実現し、また、大きな課題として残っているように、極めて先見性の豊かな教育者でした。しかし、五無齋先生の「振り子」は、決して高潔な教育者の極点にとどまらず、明治38年、読売新聞の「全国奇人奇行録」で第一等に入選したように、生涯、対極点との間を大きく、激しく揺れ続けました。「謙遜は美德に非ず」と豪語する毒舌や放言、奇行もまた五無齋先生であったのです。

諏訪で療養していた島木赤彦（アララギ派歌人）を見舞った、同じアララギ派の歌人で、当時、小説「野菊の墓」を発表して夏目漱石から高く評価されていた伊藤左千夫に、いきなり「お前に万葉のよさがわかるか。」と啖呵を切ったという五無齋先生の「振り子」の対極点について、狂歌の領域で考えてみました。

広辞苑（第七版）は、狂歌について、「諧謔・滑稽を詠んだ卑俗な短歌。万葉集の戯笑歌、古今集の俳諧歌の系統を受け継ぐもので、鎌倉・室町時代に行われ、特に江戸初期及び中期の天明の頃に